T:たがいに－over:越える　T:ともに－over:越える　Talk over:じっくり話し合う

「みんなで語り合う人権学習」は、自分を好きになる。
人が大切に思えるようになる。伝えることの大切さに気づく。
つながる喜びを感じる。立場や年齢を越えていく。学び合いの力を最大限に引き出す。
そんな人権学習をより多くの人に伝えるため、T-over人権教育研究所は設立されました。

第3種郵便物認可　徳島新聞　2021年(令和3年)5月1日　土曜日

記者の視点

門田　誠　編集委員

差別と向き合う時間

僕の親は差別されてきました。親の親も差別されてきました。それをないことにされるのは寂しいんです。自分にも小学生の娘がいます。娘にも正直に生きていってほしいと思っています。あることをないことにはできないんです。

3月17日の午後、徳島市の八万中学校体育館。床に座った1、2年生に、しんじ(40)が話し掛けた。目には涙が浮かんでいた。

はなちゃん(24)が言葉をつないだ。

一番怖いのは無知であることなんです。なぜかって言うと、子どもって何でも親からまず教わるんですよね。お母さんからあれしなさい、これしなさいって言われたら普守るよね。親の言葉ってすっごい強くて、そこで何も知らなかったら、そのまま受け入れてしまうと思うのね。そうならんために、差別っていけないというのを学習しとかないといけないんじゃないかと私は思います。

「しんじ」と「はなちゃん」。2人は共に、同和地区に生まれ育った。この日は2学年合同の人権学習のゲストとして招かれた。

同和問題に関する教育は学校ですべきなのか、しなければそのうちになくなるのではないかという、教師から投げ掛けられた問いを巡り、生徒たちが意見発表している中での2人の発言が冒頭の言葉だ。

しんじは職場での経験を語った。筆箱に「○○○はこの箱に触るな」と書かれていた。地区出身の当事者の心情を逆なでする差別用語だった。「悔しかった」と振り返るとともに「こういう差別に直面したときに、中学校での人権学習がすごい糧になった。書いた人に、自分の口で『これはおかしいこと』と説明ができた」と話し、差別が現実に残っている現状と人権教育の大切さを訴えた。

八万中で行われた人権を巡る全体学習。手前からしんじ、はなちゃん、吉成さん＝徳島市

他にも、子どもの頃から今に至るまでさまざまな局面で、2人は差別を感じて生きてきた。

取材でこの時間を共にした。2人の言葉は生徒の心を揺さぶるのに十分な力が宿っていた。およそ2時間の授業中、次々と手が挙がり、約50人が発言した。

この人権学習を企画した吉成正士教諭は教師になって30年以上になる。当初、人権学習の難しさに悩んだ。自分が何も語れなかったためだ。教師5年目に着任した中学で、今回、八万中で行った全体学習と呼ばれる人権学習法と出合ったことが転機となった。生徒が集まり、本音をぶつけ合う中で教師の想像を超えて成長し、理解し合う様子を何度も見せられた。

「全体学習の場で涙を流し発言する地区出身の子がいた。心が揺さぶられた。なんで泣くのか、誰が泣かしているのか。自分は何をしてきたのか。親の差別発言を容認してきてはいないか。その時から自問自答が始まった」と話す。

部落差別は学校や職場で教育、啓発が進められてきたにもかかわらず、今も消え去っていない。差別を助長するインターネット上の書き込みは後を絶たず、2016年には部落差別解消推進法が成立した。

同和教育は、かねて「寝た子を起こすな論」があった。学習しなければ知らずに済むのに、との考え方だ。吉成教諭はその視点には同調しない。

「残念だが差別はゼロにならない。けれど限りなくゼロにしたい。全体学習で皆の意見を聞く中で自分の考えが右へ左へと揺れ、そうしているうちに自分なりの答えにたどり着く。この過程が大事だ」と学習の必要性を語る。

人を大事に思えるようになる、人とのつながりや出会いを大切に思えるようになる。それが人権学習の目的だろう。その先に差別のない社会がある。今もその社会課題はいささかも小さくなっていない。

「人権」本音で語ろう

八万中・吉成教諭 学習の場づくり

自宅に研究所開設 HPで情報発信も

徳島市北田宮4の自宅に活動拠点として「T-over 人権教育研究所」を既に開所。ホームページ(HP)も開設した。「共に超える」「トーク・オーバー(じっくり話し合う)」などの意味を名前に込めた。松茂中教諭、森口健司さん(62)と2人で共同代表に就いた。

同和問題やいじめ、障害者、性別、性的少数者(LGBT)、人種などを巡る人権問題は後を絶たず、最近は新型コロナウイルスの感染者に対する誹謗中傷なども深刻化している。

吉成さんは、クラスや学年が交じって生徒や教師が発言する「全体学習」と呼ばれる学習法が、意見の違いを共に超え、認め合うという成果をもたらす点で有効だとする。人権教育研究所ではこうした学習法も用いながら、差別やいじめのない社会の実現を目指す。

吉成さんは「人権とは何か、差別とは、仲間とは。そういう根源的な問いに皆で向き合う時間が、差別のない社会の実現や生徒の成長にとって有意義だと痛感してきた。子どもたちだけでなく、大人も含め、人権という視点をしっかり根付かせる場づくりに、学校を離れても取り組みたいと考えた」と話す。

HP開設のほか、人権に関する機関誌への投稿や県内中学校での学習などの活動も展開中で、2日には県教育会館(徳島市)で「『おとなのための』人権を語り合う『T-overの会』」を開く。(門田誠)

徳島市の八万中学校教諭、吉成正士さん(56)が学校現場とは別に「人権」について学ぶ場づくりに取り組んでいる。長年、人権教育に携わる中で大切さを実感してきたという、大勢が本音で語り合う場の企画運営や、人権や平和に関する県内外のグループ紹介、県内の中学生たちが寄せた人権に関する意見の情報発信などを行う。

「人権は大切だ」と言いながら、人権を大切にできていない現実、他人の人権を平気で踏みにじっている現実はないだろうか。学校で、「人権についての作文を書く」と言うと、「また人権」「何も書くことがない」と、少し大きめの声で、これ見よがしに口にする子どもがいる。

PTAの会合で、所属する専門部をどこにするかを決める場面。人権部が人気だと聞き、同和教育・人権教育を熱心に取り組んできた元教え子は、内心よろこぶ。次の瞬間、奈落の底に突き落とされる。

「することが少なくて楽だから…」

人権に対する扱いを知り、愕然とする。

5月2日に開かれた、「『おとなのための』人権を語り合う『T-overの会』」参加者の発言だ。

「差別が見えにくくなった」と言われることがあるが、それがここではっきり見えた。同じ思いをしたおとなは、他にいないだろうか。

気づいていないふりをしながら、人の思いを平気で踏みにじっている現実。それは、子どもだけでなく、おとなの日常においてもある。

人権学習は、学生を「卒業すれば終わり」ではない。人権文化は時代と共に常に進化する。したがってアップデートをやめた時点で、遺物と化す。人権学習は、生きている限り続いていく学習だ。

思ったことがスナオに言える場であったなら。それは 部落差別に限らず、あらゆる人権課題・生活課題についても同じである。思ったことがスナオに言える関係があれば、知らず知らずのうちに人を傷つけてしまうこともない。そんな社会をつくっていくことが、今、私たちに求められている。　【T-over 人権教育研究所】

座席は100席予定しております。新型コロナウイルス感染症発生状況や、とくしまアラート発令状況により
収容人数を増減いたします。収容人数を超える場合は、入場を制限させていただく場合がございますのでご了承ください。

お問合せ：鳴門市教育委員会生涯学習人権課　☎088-686-8804